

風雨の晩の小僧さん

小川未明

青空文庫

都会とがいのあるくつ店てんへ、奉公ほうこうにきている信吉しんきちは、まだ半年はんとしとたたないの、なにかにつけて田舎いなかのことが思い出おもされるのです。

「もう雪ゆきが降ふつたらうな。家いえにいれば、いま時分じぶん炉辺ろべにすわって、弟おとうや妹むすめたちとくりを焼やいて食たべるのだが。」

そう思うおもと、しきりに帰かえりたくなるのであります。けれど、出しゅつ発ぱつのさいに、

「信吉しんきちや、体からだを大事だいじにして、よく辛棒しんぼうをするのだよ。」と、目めに涙なみだを浮うかべていった母親ははおやの言葉ことばを思い出おもし、また、同時どうじに、

「どうせ一度いちどは世よの中なかへ出でなければならぬのだ。どこへいっても家いえにいるようなわけにはいかぬ。奉公ほうこうが辛つらいなどといって、帰かえってきてはならぬぞ。」と、父親ちちおやのいったことを思い出おもすと、いかに恋こいしくても帰かえられはしないという気きがしました。

そうかと思うおもと、白髪しろがみの祖母そぼの顔かおが、眼がん前ぜんに見みえて、

「信しんや、いつでも帰かえってこいよ。おまえには家うちがあるのだから、ひどくしかられたり、辛し棒ぼうがでできなかつたり、また病びょう気きにでもかかかつたなら、いつでもお暇ひまをもらもらってくるがいい。そのときは、そのときで、田舎いなかに奉公ほうこう口くちのないではなし。」と、祖母そぼは、いった

のでした。

彼が、故郷のことを思い出すと、まずこのやさしい祖母の姿が浮かんだのです。

「あんないいおばあさんに、僕はよく悪口をいって、まことにすまなかつた。」と、信吉は、後悔するのでした。

彼は、なにかいい口実が見つかったら、田舎へお暇をもらって帰りたいと思いました。奉公が辛いなどといったら、きつと厳しい父親のことだからしかるであろう。けれど、病氣であつたなら、母も、祖母も、かならず口をそろえて、「おおかawaiiそうに。」といつて、帰つた自分を慰めてくれるにちがいない。彼は、故郷を慕うのあまり、病氣になればとさえ考えていたのでした。

このごろの寒さに、彼は、かぜをひいたので。すると、そのことを田舎へ手紙で知らせてやりました。しかし、もとよりたいしたことなかつたので、すぐなおつてしまひました。この店の主人は、やはり小僧から今の身代に仕上げた人だけあつて、奉公人に対して同情が深かつたのでした。信吉が病氣にかかると、さつそく医者に見せてくれました。そして、やがて、床から起きられるようになると、彼に向かつて、

「早くなおつてよかつた。これからもあることだが、すこしぐらいのことを田舎へいって

やつてはならない。どのみち、親たちに心配をかけるのは、よくないことだからな。こうして、家を出たからには、何事も自分のことは、自分の力ですという決心が肝要なのだ。そして、親に心配をかけるのが、なによりも不孝であると知らなければならぬ。いと、主人は、諭すように、いったのでした。これを聞いたときに、信吉は、いままでの自分の意気地なしが、真に恥ずかしくなりました。

「ああ、こんなもののわかつた主人を持ちながら、それを幸福と思わずに、いつまでも田舎を恋しがったり、ちよつとした病氣でも知らしてやったりして、ほんとうに悪かつた。」と、後悔しました。彼は、自分のまちがった行為に気づくと、すぐに心から反省する純な少年であつたのです。

彼は、そろそろ仕事ができるようになったので、田舎の両親へあて、はがきを出しました。

「寒くなりましたが、ご両親さまには、お変わりもありませんか。私のかぜは、もうすっかりなおつて、起きられるようになりましたからご安心ください。今後よく辛棒して働きます。大きくなつて出世いたします。」と、それには書いてありました。

前後して親しかつた友だちから、手紙がとどきました。

なつかしき信吉くん。
* * * *

こちらは、毎日ちらちらと雪が降っている。二、三日前田圃にたくさんのほまねこが降りていた。おそらく海も荒れて、魚が捕れないからであろう。僕が石を投げると、一時に空へ舞い上がって、それはきれいであった。しかも、奇怪な風景という感じがした。空は、毎日灰色に曇っている。そして、寒い風が吹いている。関東の空は、これから青空つづきだと聞いたが、日本海岸と、太平洋岸とでは、それほど相違があるのだろうか。もつとも山一つ越せば、雪が降らないのに、こちらは、雪が四尺も五尺もあるのだから、まったく自然の現象ばかりは奇妙なものだ。

君は、その青空の下で、朗らかに働いていることだろう。僕たちは、夜となく、昼となく、あのゴウウ、ゴウウとほえるような、また遠方で、ダイナマイトで石を砕くような海鳴りを聞きながら、家事のてつだいをしたり、やがてくる春の日の用意に怠りがない。なつかしき信吉くん。

君は、あの谷川のほとりのほおのきを知っているだろう。二人がやまばとの巣を捕りにいって、もう先にだれかに捕られてしまつて失望したことがあったね。僕は、あのあ

たるの景色が好きだ。君が出発する前に、平常から親しくしていた、たつ子さんと三人で、あすこの石の上で、なつみかんや、ゆで卵を食べて、形ばかりの送別会をやった、そのとき、ちようど、ほおのきの花が咲いていたのを覚えていないか。僕は、いつまでもあのときのことを忘れずにいる。なぜなら、あの日は、独り君だけの送別会でなく、たつ子さんと送別会にもなつてしまったからだ。たつ子さんは、君が東京へ立つて後まもなく、上州の製糸工場へいつてしまったのだ。

この冬は、僕にとつていつになくさびしい。かるたを取つて遊ぶにしても、またスキーをして遊ぶにしても、僕は、親しい二人の姿が見えないので、なんとなく独りぼちのよくな気がする。しかし僕たちは、いつまでも子供ではおられないだろう。みんなは大きくなって、この世の中のためにつくし、親に孝行をしなければならぬのだ。

どうか、いつまでも、学校時代に培われた健全な精神の持ち主であつてくれ、そして、たとえ遠くわかれていても、おたがいに手を握り合つてゆこうよ。こちらのさびしいのにひきかえて、東京は、いつもにぎやかならしい。おひまがあつたら、いろいろとおもしろいことを知らしてもらいたい。

* * * * *

信吉は、手紙を懐にしまつて、両方の目を赤くしながら、しばたいていました。日が暮れて、雨が降り出しました。信吉は、仕事場へ出て、平常のごとく働いていました。

「きよようの天気予報は当たつた。あのいい天気が、急にこんなに変わつたからな。」と、年上の職工は、仕事台の上へ前屈みになつて、朋輩と話をしました。

このとき、主人は、ふいに思い出したように、

「このあいだいらしたお嬢さんの、オーバーシューズは今晩までのお約束でなかつたかな。」と、仕事場を見まわして、いいました。

「そうです。私が、いま造つています。もうじきにできあがりですが。」と、茶色のセーターを着た職工が、電灯の下で手を働かせながら、答えました。

「お約束なのだ。できたらすぐにおとどけてくれよ。」と、主人は、いつていました。

* * * * *

「お母さん、たいへんな雨ね。私、明日オーバーシューズがなくて困るわ。」

「きよようの晩までというお約束だつたでしょう。だけど、この雨風では、できていて

もどけられないでしょう。」

「学校で、オーバーシューズがないと、おくつを脱いで、スリッパをはかないとしか
れるのよ。」

「お天気になりしだい、私が催促にいつてきますから、明日、もう一日だけ我慢して
くださいね。」

母と娘は、戸外に叫ぶ雨風の音に耳を澄まして、火鉢のそばでお話をしていました。

それは夜の八時ごろでありました。

隣のペスが、垣根の内からしきりにほえているのが聞こえます。この犬は、知らぬ人
見るとよくほえる犬で、いつか郵便屋さんが、手紙の配達ができないと怒っていたこ
とがありました。その後、しばらく鎖でつないであつたが、またこのごろは、放しておく
ようであります。

「よくほえる犬だこと、なににほえているのでしようね。」と、かね子は、読んでいる雑
誌から目を上げて、外のけはいを聞き取るようにしていました。

「あの犬がいると用心はいいけれど、外を通る、なんでもない人までが迷惑しますね
。」と、お母さんは、娘が正月に着る赤い色合いの勝った衣物を縫いながら、おつし

やいました。

「ごめんください。」

このとき、玄関のあたりで、小さい声がかしました。その声は、雨風の音に、半分消されてしまったのです。

「だれかきたのでない？」

「どなた！」といって、お母さんは、立ち上がられました。かね子は、全神経をお母さんの足音の消えていく方へ集めていました。

「まあ、この雨に、とどけていただいたのですか、すみませんでしたねえ。」

お母さんの、こういつていられる言葉を聞くと、

「オーバーシューズが、できてきたのだわ。」と、かね子は、すぐに走って、お母さんのところへいききました。

「かね子、この雨風の中を持ってきてくださったのだよ。」

お母さんは、くつ屋の小僧さんに対して、心からねぎらっていられました。かね子は、いままで不平がましいことをいったのが、なんだか気恥ずかしく感じられて、顔を赤らめました。しかし、さすがに喜びを禁じられなかったのです。そして、そこに、やつと十二、

三の少年が、ぬれねずみになって立っているのを見ると、目頭が熱くなりました。軒燈の火が、マントを照らして、流れ落ちるしずくが光っています。

「お足に合いますでしょうか？」と、ふろしきを解いて、オーバーシューズを出して、少年はいいました。

「そうですね、だいじょうぶでしょう。かね子、ちよつとくつに合うか、当ててごらん下さい。」と、お母さんは、おつしやいました。

かね子は、玄関わきの戸だなを開けて、くつを取り出しました。そして、オーバーシューズをはめてみますと、すこし小さいようです。

「どれ、私にお見せなさい。」と、お母さんは、かね子の手からオーバーシューズを受け取って、みずからくつにはかせようとしましたが、やはり小さくて入らないのでした。これを見ていた、小僧さんは、

「すこし小さいようですね。持つて帰りました直してまいりましょう。そして、明朝早くおとどけいたします。」といいました。

「朝は、学校が早いのですから、七時までに持つてきてもらわないとまにあわないのですよ。」

「承知いたしました。」

小僧さんは、オーバーシューズを包んできたふろしきへふたたび包みかけていました。

「この雨風の中をせっかく持つてきてもらつてお気の毒ですね。」

「どういたしましたして、こちらが悪いのです。寸法をまちがえましてすみません。」

小僧さんは、丁寧にお辞儀をして歸つてゆきました。

それを見送つていた、かね子さんは、小僧さんの姿が闇の中に見えなくなる時分、

「かわいそうね。」と、しみじみとした調子で、お母さんに向かつて、いいました。

「みんな、ああして修行をして、大きくなって、いい商人になるのですよ。」と、

お母さんは、いつて、しばらく考えていらつしやいました。

* * * *

信吉は、朝早く目を覚ますと、昨夜からの雨は、まだやまずに降りつづけていました。

「そうだ、お嬢さんの学校へいかれる前に、オーバーシューズをおとどけしなければならぬ。」

彼は、起きると、早くそうじをすまして、雨の中を出かける仕度をしました。昨夜は、

はじめての道を歩いて、家を探すのにずいぶん骨がおれたけれど、今日は、その心配がなかつたのです。

「ああ、ここだつたな。」と、彼は、犬にほえられた家の前へくると思い出しました。

この雨では、ああいつたけれど、小僧さんは学校へいく前にはとどけられないだろうと、食卓に向かつて、かね子が思っているところへ信吉は、ちようど玄関を開けて入つたのです。

これに對して、かね子もお母さんも感心してしまいました。そして、二人は、いっしょに玄関へ飛び出してきてお札をいつたのでした。

信吉は、ただ約束を守つて、なすべきことをしたまでだと思つたが、こうして感謝されると、自分の体がいくら雨にぬれてもうれしかったのであります。

その日、故郷の父親から久しぶりに便りがありました。今年の夏は、ひじょうに暑かつたかわりに、作物がよくできて、村は、景氣がよく、みんなが喜んでゐる。我が家でも、日ごろからほしいと思つた牛を一頭買ったと書いてありました。信吉は、心の中で、幾たびも万歳を叫んだのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「風雨《ふうう》の晩《ばん》の小僧《こぞう》さん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年5月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風雨の晩の小僧さん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>